2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**戦後文学・戦後思想におけるノマド表象をめぐる比較文学的研究** **－安部公房・宗左近・柄谷行人を中心に－**
キーワード	①比較文学・比較文化、②戦後文学、③ノマドロジー

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	オオバ　ケンジ 大場　健司
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	九州女子大学　人間科学部　心理・文化学科　講師
現在の所属先・職位等	九州女子大学　人間科学部　心理・文化学科　講師
プロフィール	最終学歴は九州大学「博士」（学術）学位取得。専攻は比較文学・比較文化、日本近現代文学など。台湾：国立台湾大学外国語文学研究所交換留学、韓国：朝鮮大学校外国語学部日本語科助教授、台湾：国立国防大学語文中心専任教師などを経て、現在は九州女子大学人間科学部心理・文化学科講師、九州女子大学大学院人間科学研究科講師（Mマル合研究指導教員）。 主な研究業績として、単著学術書『1960s 失踪するアメリカ―安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、2022 年 12 月、全 432 頁、ISBN：9784861108518）で第 29 回日本比較文学会賞を受賞。

1. 研究の概要

本研究は、日本の戦後文学・戦後思想における「ノマド」(nomad) の表象 (representation) を、比較文学・比較文化や東アジア、ポストコロニアリズム (postcolonialism) の視座から考察するものである。「ノマド」とは「遊牧民」や「狩猟採集民」など「移動する人々」を意味する。日本の文脈で言えば、柳田國男（1875-1962 年）らの民俗学や日本思想において「山人」や「縄文人」に関する言説が流行したことが想起される。

本研究では、小説家の安部公房（1924-1993 年）、詩人の宗左近（1919-2006 年）、思想家の柄谷行人（1941 年-）のテクストを手掛かりに、戦後の文学・思想における「ノマド」の表象を比較文学・比較文化的に吟味した。それは、文学・思想における「移動」が、小説家・詩人・思想家の政治性と密接に結びついているからである（例：安部公房は満洲からの引揚者である）。この作業をとおして、戦後日本の言説空間における政治性のネットワークを明るみに出すことができた。

2. 研究の動機、目的

本研究の研究者（大場）は単著学術書『1960s 失踪するアメリカ―安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、2022 年 12 月）で第 29 回日本比較文学会賞を受賞した。この拙著では、安部公房が 1960 年代にナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) やポール・ボウルズ (Paul Bowles, 1910-1999) らのアメリカ文学を受容しながら、「都市」や「辺境」での「失踪」という「移動」を描いていたことを比較文学・比較文化的に実証

した。安部公房は 1960 年代に「都市」や「辺境」を背景にしたノマド的な「移動」や「失踪」を主題化することで、「明治百年」に代表される日本のナショナリズム（nationalism）を批判していたのだ。

この過程で、宗左近や柄谷行人のみならず、宗左近や柄谷行人のみならず、梅原猛（1925-2019 年）、大江健三郎（1935-2023 年）や開高健（1930-1989 年）、津島佑子（1947-2016 年）といった作家・思想家たちが「狩猟採集民」や「遊牧民」、「縄文人」といった「ノマド」を主題化していることが判明した。このことから、「ノマド」の視座から新たに戦後日本の文学史・思想史を再編成するという着想を得た。

3. 研究の結果

1 年間の研究期間を経て、安部公房や宗左近、柄谷行人、津島佑子、村上龍（1952 年-）、細田守（1967 年-）といった小説家・詩人・思想家・アニメ監督の作品における「ノマドロジー」を比較文学・比較文化の視座から脱領域的・横断的に論じることができた。

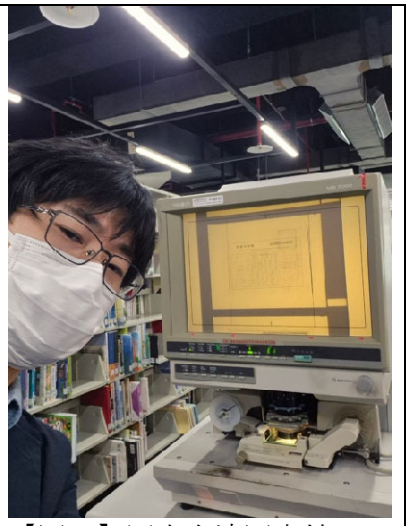
研究者（大場）の安部公房研究や東アジアのポストコロニアリズムについては春風社編集部編『わたしの学術書 2―博士論文書籍化をめぐって』（春風社、2025 年 10 月）に掲載した（研究成果①、【図 1】）。また、安部公房の文学テクストにおける都市空間での「失踪」（移動）のイメージについては、講演「安部公房研究と比較文学―現代思想・同時代言説・アメリカ文学」（令和 8 年度北九州筑豊地区国語部会総会、於・福岡県立八幡南高等学校、2026 年 5 月 29 日）を行なった（研究成果⑥、【図 2】）。



【図 1】『わたしの学術書 2―博士論文書籍化をめぐって』表紙



【図 2】講演「安部公房研究と比較文学―現代思想・同時代言説・アメリカ文学」の様子


【図 3】国立台湾図書館での貴重なマイクロフィルムの調査の様子

詩人の宗左近については、宗左近の詩や美術評論における「縄文」表象に関する学術論文を執筆し、全国査読誌に投稿していたが、修正後にもう一度、次号以降に投稿することとなっている。大幅に加筆・修正を行なった上で、2026 年度以降に再投稿を行いたいと考えている。

思想家の柄谷行人については、柄谷行人の思想における「ノマドロジー」について考察するために、柄谷を含む日本の戦後思想・現代思想を東アジアの視座から論じた林少陽著『戦後思想と日本ポストモダン―その連続と断絶』（白澤社、2023 年 8 月）の書評を執筆し、『九大日文』第 46 号（2025 年 10 月）に投稿した（研究成果③）。

柄谷行人は『遊動論 柳田國男と山人』（文藝春秋、2014 年 1 月）において柳田國男の民俗学を評価しているが、柳田の「山人」論は台湾の原住民の影響があった。そこで本研究では、戦後・現代における「山人」論と比較するために、植民地期台湾における山岳や原住民の表象を当時の出版メディアとの関係から調査した。そこで、研究発表「山岳と植民地主義―雑誌『臺灣山岳』をめぐって」（第 13 回 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 2025 北九州大会、2025 年 8 月 20 日）を行い、台湾山岳会が発行していた雑誌『臺灣山岳』全 13 巻におけ

る山岳や原住民の表象について考察した（研究成果⑤）。また、『臺灣山岳』の関連資料が多数、収録されている、台湾の国立台湾図書館に海外出張を行い、貴重なマイクロフィルム資料などの調査を行なった（2026 年 3 月 21 日～3 月 23 日、【図 3】）。調査結果は今後、国際査読誌に投稿する予定の学術論文に反映させたい。

また、津島佑子については、長編小説『黄金の夢の歌』（講談社、2010 年 12 月）における「遊牧民」や「アイヌ」の表象について、研究発表「趣旨説明・報告 津島佑子『黄金の夢の歌』とノマドロジー」（2026 年度日本近代文学会九州支部春季大会、於・九州女子大学、2026 年 6 月 6 日）を行なった（研究成果④、【図 4】）。発表内容を活字化し、日本近代文学会九州支部の学術誌『近代文学論集』に投稿予定である。

また、細田守監督のアニメ映画『おおかみこどもの雨と雪』におけるノマドロジーについて論文を執筆し国際査読誌に投稿したが、修正後にもう一度投稿することとなった。2026 年度以降に再度の投稿を行いたい。

村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』（講談社、1980 年 10 月）における都市空間での「移動」のイメージを考察した学術論文については、2026 年度以降に九州大学の先生方との共著書籍に収録したい。

次に、本研究の主な研究成果を列挙する（全研究成果の中でも特に本研究のテーマと関連するものに絞って研究成果を挙げている）。

①【書籍】春風社編集部編『わたしの学術書2―博士論文書籍化をめぐって』（春風社、2025年10月、大場健司「自由な諸個人のための批評」を担当）

②【論文】大場健司・河本美紀・賴怡真「メディア・表象・植民地―台湾・香港と日本近現代文学」（『東アジアと同時代日本語文学フォーラム 次世代フォーラム 2025 予稿集』、東アジアと同時代日本語文学フォーラム、2025年8月）

③【書評】大場健司「「林少陽著『戦後思想と日本ポストモダン―その連続と断絶』」（『九大日文』第46号、九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会、2025年10月）

④【研究発表】大場健司「趣旨説明・報告 津島佑子『黄金の夢の歌』とノマドロジー」（2026年度日本近代文学会九州支部春季大会、於・九州女子大学、2026年6月6日、シンポジウム「近現代文学・思想とアジア―翻訳・受容・表象」（招待講演：三宅芳夫、報告者：大場健司、賴怡真、コーディネーター：大場健司））

⑤【研究発表】大場健司「山岳と植民地主義―雑誌『臺灣山岳』をめぐって」（第13回 東アジアと同時代日本語文学フォーラム 2025 北九州大会、於・北九州国際会議場、2025年8月20日、パネル発表「メディア・表象・植民地―台湾・香港と日本近現代文学」（パネル代表者：大場健司、発表者：河本美紀、大場健司、賴怡真））

⑥【講演】大場健司「安部公房研究と比較文学―現代思想・同時代言説・アメリカ文学」（令和8年度北九州筑豊地区国語部会総会、於・福岡県立八幡南高等学校、2026年5月29日）



【図 4】研究発表「趣旨説明・報告 津島佑子『黄金の夢の歌』とノマドロジー」の様子



【図 5】研究で用いた書籍

4. 研究者としてのこれからの展望

この度は、「2025 年度 若手・女性研究者奨励金」に採択して頂き、誠にありがとうございます。おかげさまで、日本の戦後文学・戦後思想における「ノマドロジー」という「移動する人々のイメージ」を東アジアの視座から研究することができました。

私はこれまで、第 29 回日本比較文学会賞を受賞した単著学術書『1960s 失踪するアメリカ―安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、2022 年 12 月）などで、日本／アメリカの小説を中心とした日米比較文学を研究してきましたが、本研究を経て、日本／アメリカ／東アジア（特に台湾）という 3 つの地域に跨がる比較文学・比較文化研究を行うことができました。今後も 3 つの地域でトライアングルを形成した上で、脱領域的・横断的な研究を行なっていきたいと思っております。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

「2025 年度 若手・女性研究者奨励金」に採択して頂いたおかげで、東アジア地域、特に台湾において本格的な資料調査を行うことができまして、大変感謝しております。具体的には、植民地期の資料や台湾の山岳、民俗学関連の資料が多数、所蔵されている国立台湾図書館にて資料調査を行うことができました。台湾には日本には存在しないけれども、貴重なマイクロフィルム資料や雑誌資料が存在しており、戦前・戦後における原住民の表象を比較する上でも、非常に有意義な資料調査となりました。今後も、日本／アメリカ／東アジアという 3 つの地域に関する、国際的な比較文学・比較文化研究を行なって参ります。研究成果に関しましても、最終的には単著学術書として発表する予定ですので、今後も本研究を継続していきたいと考えております。